

令和7年11月6日

課名 地域政策局

平和推進プロジェクトチーム

担当者 担当課長（国際連携担当）西澤

内線 2466

「核の歴史に関するサマーキャンプ in ひろしま 2025」の 開催結果について

（被爆・終戦80年「若者が集い、未来に平和をつなぐプロジェクト」）

1 要旨・目的

核兵器廃絶に貢献できる若者の人材育成を図るため、日本を含む世界13カ国から核分野の若手研究者を広島へ招いて、核の歴史や研究方法などを学ぶための対面での集中合宿を「ローマ・トレ大学」と連携して実施した。

2 現状・背景

- 当初、米国の著名シンクタンク「ウィルソン・センター」が実施する集中合宿を誘致する形で、実施予定であったが、米国の大統領令により、同センターが一部プログラムを除き活動を停止した。
- その後、これまで同集中合宿の企画・運営の中核を担ってきた「ローマ・トレ大学（政治学部）」から事業を引き継ぎたい旨の申し出があったため、これを了承し、覚書を締結した上で、予定通り事業を実施することとした。

3 内容

(1) 実施主体

広島県／へいわ創造機構ひろしま（HOPe）、ローマ・トレ大学

(2) 受講者

国内外の核分野の若手研究者等15名 ※日本を含む13カ国から参加

(3) 期間

令和7年9月7日（日）～15日（月祝）

(4) 場所

広島市国際青年会館（広島市中区加古町4-17）

(5) 内容

広島平和記念資料館見学、被爆者講話、核の歴史に関する講義、講義を踏まえた講師と学生との意見交換、学生による研究発表と講師陣によるフィードバック

日程	内容
9/7（日）	開会式、平和記念資料館訪問、被爆者講話
8（月）	・講義（歴史研究の方法論、米ソの核開発計画、世界の被爆者） ・学生による発表（信頼醸成措置機能の検証）
9（火）	・講義（キューバ危機、米ソの水爆開発計画） ・学生によるグループ会議（核兵器の正体） ・核関連映画『13デイズ』上映会
10（水）	・講義（核軍備管理の歴史、欧州・東アジアの拡大抑止、中国の核プログラム） ・学生による発表（軍備管理の設計） ・基調講演『核兵器なき抑止力』
11（木）	・講義（世界の核秩序の中の日本、1970年代の世界的な核秩序の形成） ・学生による発表（P5プロセスとNPT）
12（金）	・講義（南アフリカの核プログラム、カザフスタンの核の歴史） ・学生による発表（戦略的安定性）、核に関するドキュメンタリー上映
13（土）	・講義（国際的核秩序と冷戦の終結1、核兵器禁止条約の課題と展望） ・公開シンポジウム
14（日）	・講義（国際的核秩序と冷戦の終結2、冷戦後のグローバル核秩序の課題） ・学生による発表（サウジアラビアとパキスタンの核開発計画）
15（月祝）	学生によるグループ発表、総括セッション

4 公開シンポジウム

(1) 趣旨

集中合宿の一環として、県民向けの公開シンポジウムを開催した。

(2) 日時

令和7年9月13日(土) 13:30~16:30

(3) 場所

広島大学東千田キャンパス(広島市中区東千田町1-1-89)

(4) 主催

広島県／へいわ創造機構ひろしま(HOPe)、広島大学、ローマ・トレ大学

(5) テーマ

世界は核抑止への依存をどのようにして低減できるか

(6) 参加者

92名(オンラインを含む。)

(7) 内容(発言要旨は別紙のとおり)

時間	内容	登壇者等
13:30-13:45	開会挨拶	広島県知事/HOPe 代表 広島大学学長(副学長代読)
13:45-14:30	セッション1	【モデレーター】 岩間陽子(政策研究大学院大学教授)
	歴史の教訓	【パネリスト】 ・マシュー・ジョーンズ(ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)教授) ・デビッド・ホロウェイ(スタンフォード大学名誉教授) ・マリアナ・ブジェリン(マサチューセッツ工科大学(MIT)核セキュリティ・政策研究所研究員)
14:30-15:15	核兵器と核秩序の現状と未来	【パネリスト】 ・西田充(長崎大学多文化社会学部教授) ・トン・ジャオ(カーネギー国際平和財団(中国)核政策プログラム・シニア・フェロー) ・ジョセフ・ピラット(ロスアラモス国立研究所国家安全保障・国際研究センタープログラム・マネージャー)
15:15-15:30	休憩	—
15:30-16:30	セッション2 セッション1を踏まえた意見交換	【モデレーター】 レオポルド・ヌティ(ローマ・トレ大学教授) 【パネリスト(学生)】 参加学生4名による発表(国籍:レバノン、イタリア、ポーランド、英国/米国)

5 予算(単県)

49,047千円

6 成果

- 本プログラムに、被爆の実相に触れる機会や核兵器に依存しない安全保障に関する講義を盛り込んでいただいたことにより、参加した若手研究者に、核兵器問題を、廃絶に向けて解決すべき課題として考える契機を提供することができた。
- 中には、核兵器問題が深く人間的な問題だと実感し、今後の研究テーマを変更して、被爆者のメッセージを広めたいと述べた者もいるなど、キャリア形成に影響を与える機会を提供できた。
- 公開シンポジウムでは、核抑止に依存しない安全保障をテーマとして、核に関する歴史や科学史の研究者と安全保障の研究者がともに議論したことによって、安全保障のみならず、歴史的な視点を交えた、より幅広い観点から、核抑止の問題を考えることができた。
 今後は当シンポジウムの動画をウェブサイトに掲載するなどして、本県の取組を継続的に発信していく。

7 その他（関連情報）

被爆・終戦 80 年特設ウェブサイト（核分野の若手研究者集中合宿）

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/peace80/action-summer-camp.html>



公開シンポジウムのパネリスト発言要旨

(セッション1)

- 核兵器に依存しない抑止に近づくためには、政府の意思だけではなく、大衆的な運動や、核兵器を「安全」ではなく「危険」の源泉として捉える発想の転換、つまり、より広範な社会的なパラダイムシフトが不可欠である。
- ウクライナが自国内の核兵器を放棄したのは、核拡散国にはなりたくない、国際社会で責任ある国家でありたいと考えたからだ。そうした決断を下した国が、罰せられないようにするのが国際社会の責任である。
- 核兵器のない世界の実現と維持には、核兵器禁止条約のように、核兵器の非人道性を世界に広め、核兵器に汚名を着せるだけでなく、国家が核兵器を持つ動機（国家安全保障、国際的地位、国内政治）それぞれに対して手当していくことで、核兵器への依存を減らすことが必要である。
- 核兵器への依存の低減には、2つのアプローチがある。一つは、主要国に「領土の現状を武力により変更しない」との原則を明確に約束させるなど、主要国の行動を規範化することと、もう一つは、地域的に議論する機会を設けることにより、軍拡競争を抑制するための具体的な措置を推進することである。
- 核軍縮を進展させる方策として、第一に「核のタブー」の維持、第二に、NPT上の5核兵器国の対話を可能にするP5プロセスの維持、AIと核分野への影響の管理など共通の利益となる「相互利益」の追求、危機時の新たな通信チャンネルの開発・運用などがある。

(セッション2)

- 核依存を減らす方策の一つに非核兵器地帯の創設がある。重要な点は、拡散の回避が自国の利益になる仕組みづくりで、そのためには、各国が経済的な結びつきを強めるなど相互依存を通じた信頼醸成を積み重ねた上で、核安全保障の問題を議論することである。
- 核抑止への依存の低減には「なぜ世界は核兵器が必要だと信じ、存続させることになったのか」を問い直すことが必要。歴史は既存のナラティブや長年の前提を問い直す役割を果たすことができる。
- 核抑止に依存しない未来を目指すには、第一に真剣な学術研究のための予算、第二に国際的な専門家の交流プラットフォーム、第三に良質な専門知による国際的信頼の強化が必要。
- 今後10年で実施すべきことは、第一にコミュニケーションと透明性の確保、第二に核使用決定までの時間の最大化、第三に依存する核兵器の種類の限定。こうした取組を実現する上で、広島の声は特別な権威を持つ。広島の生きた記憶は、世界の良心であると同時に、政策を動かす力でもある。